哲學研究　第七十一號

シェリングに於ける自由の哲學の發展（承前）

世良壽男

二　自然こしての自由—（自然的自由の問題）

一、前にも述べたやうに、自由の概念と自然の概念とは相關的概念であつて自由の基礎付けは何等かの意味に於て自然に對してなさるべきであらうが、然し自由の確立は、かのカントに於けるやうに、自然に對する自由の本質の峻別といふことによりて全うせらるゝことは出來ぬ。自由と自然との峻別は決して自由の確立ではなくして却つてそれの限定である。自由が自然よりして峻別せらるゝ限り、如何にして自由が自然の根據として要求せられ自然を通じて實現せられ行くかといふことは永久に解くことの出來ぬ謎として殘らなければならぬ。それ故に、自由の確立は自由と自然との峻別ではなくして自然そのものゝ自由化でなければならぬ。即ち自然の本質に自由を認め、限りなき自由の流れの中に自然必然の法則をば溶解し去

ることによりてのみ自然と自由との內的結合は始めて可能である。今カントの第一批判に於ける自然はそれが吾々の認識の對象として、純粹統覺の綜合的統一によりて成立する限りに於てそは理性の自律的所產であるといふことが出來るであらう。然しながらかくして成立したる自然はどこまでも自然の概念であつて自然そのものではない。自然は理性によりて構成せられたものであらうが理性によりて創造せられたものではない。對象構成の內容的基礎としての感覺はカントに於ては、どこまでも克服することの出來ぬ非合理的のものとして殘らなければならぬ。かくて色あり音ある自然の本質と意義とは決して自然の論理的構成を明らかにすることによりて明らかにせらるゝことを得ない。自然が單に知識の對象である限り自然の理性化又は自由化は永久に吾々に對して不可能であると言はなければならぬ。次に第二批判に於ける自然は意欲の對象としての自然であつた。卽ち感性衝動を通じて吾々の意欲を動かすところの自然であつた。然るに意欲に對立しこを動かすものは單なる概念ではなくして現實的實在性を有するものでなければならぬ、感性衝動は常に現實的存在に相關係してのみ働らき得るものであるから。この意味に於て意欲の對象としての自然はかの知識の對象としての自然よりも一層

生ける具體性を有する自然であると言ふ事が出來るであらう。然しながらカントに於ては、この意欲の對象としての自然は、どこまでも意志の他律の原理であつて意志そのものゝ自律的所產ではない。こは意志によりて克服せらるべきものとして與へられたものであつてそれ自から意志の法則に從ふものではない。そは意志の消極的內容ではあるがそれの積極的內容ではない。理性と感性とはカントに於ては根本的に別異なる世界にその根據を有つ。この限りに於て自然は意欲に對して單なる倫理的克服の對象といふことを外にしてそれの內的意義を獲得することは出來ぬ。次に第三批判に於ける自然は感情の對象としての自然であつた。カントに於ては、快不快の感情能力は、對象が要求從て目的に適合するや否やといふことを判斷する能力である、それ故にこはかの特殊的より一般的を求め行くところの反省的判斷力にそれの根據を有つところの能力である。かくてこの感情從つて反省的判斷力の對象としての自然は、合目的性の見地の下に考察せられた自然である。卽ちこは客觀的合目的性を有するものとしては teleologisch であり、主觀的合同的性を有するものとしては ästhetisch である。それ故にこの感情又は判斷力の對象としての自然は、全く理論的關心と實踐的關心とをはなれたる自由そのものゝ生ける感性

的發表として吾人に對して現はれ來り、理性と感性、意志と知識、自由と自然とは、この合目的性の概念によりて結合せられたやうに見える。然しながら又飜つて考ふれば、この自然の合目的性といふことは嚴密なる意味に於てそれ自から果して可能であらうか。元來自然の自然たるところは、カントに於ては、それがどこまでも因果必然の法則によりて構成せられ規定せらるゝところにある、卽ち自然に於ては原因より結果を豫料し、結果より原因に遡ぼることは出來るであらうが、それに於て目的と手段との內的關係を辿るべき餘地はない。かくてこの自然の合目的性の原理は、カントに於ては、どこまでも判斷力の主觀的原理であつて自然そのものゝ客觀的原理ではない、從つてこの合目的性の原理による自然の美的克服は、どこまでも主觀的形式的であつて客觀的內面的でないと言はなければならぬ。此くの如く、自然は知識の對象としても意欲の對象としても又感情の對象としてもそれの充分なる理性化を全うすることを得ないとすれば、自由による自然の內的克服は如何にして可能であらうか。こはたゞこれ等知情意三者の原本的統一としての自我の深き根柢に於て對象そのものゝ成立の內的意義を反省することによりてのみ可能でなければならぬと思ふ。かのフィヒテの知識學に於ける自然は實に此の如き自我そのものゝ對

象としての自然であつた、卽ちフィヒテの自然は主客の絕對的同一としての純粹事行としての自我の無限なる活動の對象として自我によりて要求せられ生產せられたものであつた。而てこの自我に於ける對象の定立又は生產といふことに於て自然の內面的なる理性化自由化の根據は充分に確立せられたと言はなければならぬ。然しながら又他方より考ふればフィヒテに於ける自我の原理は前にも述べたやうにどこまでも道德的原理であつて單なる知識的原理ではない、從つてこの道德的自我により、それの克服の對象として要求せられ生產せらるゝ自然は、倫理的義務實現の素材といふことを外にしては何等客觀的の意義と價値とを保證せらるゝことを得ない、從つて自然そのものゝ發展はどこまでも偶然的であつて、かのカントの所謂自然の特殊付けの客觀的根據はフィヒテに於てもなほ充分明らかにせらるゝことを得ずして、殘つたのは當然であると言はなければならぬ。かくて自由による自然の克服は、かの理論的克服や美的克服と等しくこの道德的克服によりても全うせらるゝことは出來ぬ。道德的自我はなほ主觀的自我である、無限なる過程の自我である、こは未だ眞の意味に於ける主客合一としての絕對我ではない。それ故に若し自然の理性化又は自由化にして可能であるとするならば自然は決して此の如く單なる道德

我の對象でなくして嚴密なる意味に於ける主客合一としての自我卽ち知的直觀としての自我の對象としてでなければならぬ。知的直觀の對象といふことは決して單なる靜觀の對象といふことではない。こは對象をば無限の活動に於て見ることである。對象そのものをば全人格の深き根柢に於て見ることである、又は對象の奥底に生ける人間性を共感することである。直ちに對象そのものゝ本質に突入して對象と共に生き對象と共に發展することである。こは決して單なる對象の主觀化ではない、又は單なる感情移入ではない、對象の主觀化によりて同時に對象を客觀化することである、換言すれば對象そのものをば創造することである。それ故に『自然を哲學化(philosophieren)することは自然を創造(schaffen)することである、又は自然がその中に捉へられて見えるところの死せる機制より自然を解放し而て自然をば自由を以て生かし而て自然自からの自由なる發展に置き換ふることである』(Schelling, Erst. Entwurf, s. 13)。自然はそれが知識の對象として止まる限りそは單なる概念に過ぎず、それが意欲の對象である限り義務實現の素材に過ぎず、感情の對象たる限り美的假象の內容に過ぎないであらう。唯だ知的直觀卽ち全人格の對象としてのみ自然は始めて具體的全體として、生ける自由の本質として吾人に對して現はれて來

ることが出來るのである。かのカントに於て吾人に對して拒否せられ、フィヒテに於て深き自我の根柢に於て救護せられし自我の本質としての知的直觀をば、形而上學的意義にまで高め、これをば自己の凡ての哲學化の根柢となせるかのシェリングが、自然の克服に於てとりたる方法は全くこの知的直觀の方法であつた。卽ちカントに於て自然の論理的構成が明らかにせられ、フィヒテに於て自然の成立の意味が基礎付けられしとすれば、自然そのものをば知的直觀の對象とすることによりて、それ自からの本質に於て內面的に自由化し理性化することがやがてシェリングの自然哲學の根本的課題であつたと言はなければならぬ、而てこゝにかれの自然哲學がカントの批判哲學及びフィヒテの知識學に對する學的意義が存することゝ思ふ。

二、先づシェリングに從へば、凡ての知識は、かのフィヒテの言ふやうに、客觀的と主觀的、實在的と觀念的との一致に依存する。吾人は唯だ眞なるものゝみを知る、而かも眞理は一般に表象と對象との合一に於て成立するからである。今この知識に於ける單なる客觀的のものゝ Inbegriff をば自然(Natur)と名付け、これに對して主觀的のものゝ Inbegriff をば自我(Ich)又は叡智(Intelligenz)と稱することが出來るならば、この主觀的又は叡智と客觀的又は自然との結合は如何にして可能であらうか。シェリ

ング以爲らく、知識それ自からにして此の如く主觀的と客觀的、叡智と自然との內面的結合であるとするならば、この兩者の何れも他に對してそれの先在性（Priorität）を要求することは出來ぬ。そこには何等の第一も第二もなくこの兩者は全く同時的で且つ一つでなければならぬ。然しながら今吾人は此くの如き主客の絕對的同一性をば直ちに吾人の考察の對象となすことは出來ぬ、吾人はこの同一性を對象とする間に既にこれをば止揚してゐなければならぬ、卽ち吾人がこの同一性を說明せんとする間に此の同一性は破れて主客觀の對立に墮してしまうからである。而かも此の兩要素の外何物も說明原理として與へられてゐない故に吾人にしてこの同一性の本質をば探究せんとせばこの兩者の何れか一方よりして出發しなければならぬ。卽ち第一は、『客觀的が第一のものとせられ、而て如何にしてこの客觀的に一致すべき主觀的が生じ來るか』を問ふものであり、第二は『主觀的が第一のものとせられ、而て如何にしてこの主觀的に一致すべき客觀的が生じ來るか』を課題とするものである。卽ち前者は、主觀的をば客觀的より、觀念的をば實在的より、叡智をば自然より說明せんとするものであり、後者は、之に反して、客觀的をば主觀的より、實在的をば觀念的より、自然をば叡智より演繹せんとするものである。シェリングの所謂先驗哲學

(Transzendental-Philosophie)は後者であつて、彼れの自然哲學(Naturphilosophie)は卽ち前者である。而して此の兩者は共に主客の絕對的合一としての眞の知識又は眞の實在をは目指せるもの、從つてこはそれの本質に於て、それの課題の反對の方向によりてのみ區別せられ得るところの一つの學である、而てこの兩方向は唯だに等しく可能的であるのみならず又等しく必然的である故に、知識體系に於て此の兩者に對して同樣の必然性が歸せられる、卽ち先驗哲學と自然哲學とは同樣の權利を以て成立すると言はなければならぬ(System d. tr. Idealismus, S. 339-42; Einl. z. d. Entw., S. 272-3)。

三、今自然哲學の課題にして以上の如く自然そのものをば第一のものとしてこれより出發し自然と叡智との內的結合を明らかにするにありとせば、先づ自然を第一のものとするとは果して如何なる意味であらうか、又は第一のものとして出發せらるべき自然とは果して如何なる性質のものであらうか。シェリングによれば自然を第一のものとするといふことは決して單なる現實的自然を以て直ちに叡智の根源と假定してこれより出發することではない。現實的自然は現はれたる自然、生產せられたる自然であつて決して自然自體ではない、こは叡智に對しそれの對象となるべきものであつて決して叡智の根源であることを得ない。それ故に自然を第一

とするといふことは、決して現象としての自然を第一とするといふことではなくして、却つてこの現象的自然の根據に本質的自然又は自然自體を豫想することである、卽ち自然をばそれの存在の相に於て見ずしてそれの根源の相に於て見ることである、又は自然の根柢に絶對者を見、絶對者に於て自然を理解することである、卽ち自然をば知的直觀又は能產的直觀の對象とすることである(こゝに知的直觀の可能といふことはフィヒテの知識學の發展としての彼れの先驗哲學を豫想せる自然哲學に於ては問題ではない、卽ちこは凡ての先驗的思惟の機關として彼れの『先驗的觀念論の體系』に於て基礎付けられてゐるのである)。それ故に自然哲學の出發點となり根本原理となるところの自然は決してかの經驗的なる存在としての自然ではなくして、却つてこを生產し成立せしむるところの根據としての絶對者無制約者としての自然でなければならぬ、卽ちシェリングの所謂存在自體(Sein selbst)又は先天的自然(Natur apriori)でなければならぬ。かくて、如何にして此の如き存在自體としての自然又は先天的自然は可能なるか、換言すれば『如何程まで自然に對して無制約性が歸せられ得るか』(Erst. Entw., s. 11)といふことが自然哲學の最初の根本問題とならなければならぬ。

シェリング以爲らく、元來自然現象の究極的根據たる無制約者、存在自體又は先天的自然といふ如きものは、それが『如何なる有限的所產物に於ても全く自からを現はさず而て凡ての個々物が言はば唯だそれの特殊的發表に過ぎぬやうなもの』である限り、それ自から決して吾人の認識に對して現はれ來らず、從つて吾人が悟性的認識の立場に立つ限り、こはどこまでも豫想（Voraussetzung）又は假定（Hypothese）以上の價値を有することは出來ぬといふことは事實であらう。然しこの豫想又は假定はそれが決して單に氣隨的でなくして自然それ自からの如く必然的である場合に於て、換言すれば、この豫想が、それの必然性をそれ自からの中に有する場合に於て、從つて自然が知的直觀又は能產的直觀の對象となる場合に於て、こはやがて如何にしても認めなければならぬ絕對的豫想（adsolnte Voraussetzung）となる。今自然現象の內的必然性の洞察は、自然が單に個々の存在の集合ではなくして、存在の生ける全體（Inbegriff des Seins）であり、又は有機的全體（orgonisches Ganze）であることを敎へる。然るに有機的全體に於ては、全體がそれの部分によりて成立するのではなくして却つて部分は全體よりして生起したものでなければならぬ、從つて全體としての有機體はどこまでもそれの部分に對して先在（priexistieren）し得なければならぬ。それ故に自然をば

吾人が知る(Wir kennen)のではなくして却つて自然はアプリオリに存在(ist)するのである。即ち自然に於ける個々物は先づ全體(das Ganze)によりて又は自然一般の理念(Idee einer Natur überhaupt)によりて規定せられるのである(Einl. z. d. Entw., S. 277-9)。而してこの個々の自然現象に對してそれの統一的實在根據として先在するところの全體としての自然をば、シェリングは、普遍的自然(allgemeine Natur)又は全有機體(Allorgnismus)と呼んでゐる。然らば此のごとき先天的なる普遍的自然又は全有機體は果して如何なる本質を有するか。先づこの普遍的自然又は全有機體は、それが凡ての存在としての個々の自然現象の絶對豫想であり根據である限りこはもはやそれ自から存在であることを得ないのは言ふまでもない。存在は決して存在を基礎付くることは出來ぬ、存在を成立せしむるところのものは存在ではなくして存在の當爲即ち存在自體でなければならぬ。それ故に普遍的自然が自然現象の根據として先在するといふことは決して現實的存在の意味ではない、こは自然の理念として又は自然そのものゝ根本機能又は範疇として存在するといふ意味である即ちこはどこまでも一つの當爲的存在であると言はなければならぬ。然しながらこれと同時にこの理念又は當爲的存在としての普遍的自然は決して單なる抽象的且つ靜

的なる觀念的普遍者であると考へられてはならぬ。こはどこまでも現實的自然に內在してこを可能ならしむる生ける力でなければならぬ、卽ち能產的理念又は能產的當爲でなければならぬ、動的普遍者でなければならぬ。シェリングがこの普遍的自然をば又原本的能產性(ursprünglehe Produktivität)又は能產性自體(Produktivität selbst)又は能產的自然(natura naturans)又は主觀としての自然(Natur als Subjekt)と稱したのは全くこの當爲的存在としての普遍的自然の動的本質をば表したものに外ならないと言はなければならぬ。かくて自然はそれ自から無限の能產的活動である、不斷の創造的發展である。自然はそれ自から自己の領域を與ふる故に何等の外的力も自然の中に入り來るを得ない、自然はそれ自から自律的であり、凡ての法則は內在的である、それ故に『自然はそれ自からの立法者である』(Die Natur ist ihre eigne Geset geberin)。而て自然に於て起るところのものはそれ自からの中に存するところの活動的運動的原理によつて說明し得なければならぬ故に『自然はそれ自から充足する』(Die Natur ist sich selbst genug)。而て此の如く自然は自己自からの立法者であり、自己充足的である故にやがて『自然は無制約的實在性を有つ』(Die Natur hat unbedingte Realität)といふことが必然的に立せられなければならぬ(Erst. Entw., S. 17)。而てこゝに無制約者

としての自然又は先天的自然の可能の根據が存すると言はなければならぬ。

四、然しながら以上の如く自然の本質にして無制約者として、存在自體として、原本的能產性としての有機的全體であるとするならば、こは如何にして被制約者として、存在として、所產物としての個々の自然現象に發展し來るか、換言すれば當爲的存在としての原本的能產性に於ける觀念的無限性(ideelle Unendlichkeit)は如何にして所產物に於ける經驗的無限性(empirische Unendlichkeit)に移り行き得るか。シェリング以爲らく、元來『絕對的活動は、有限的所產物によりてにあらずして無限的所產物(unendlieche Produkt)によりてのみ表はされ得べきである。然るに今經驗的に無限なるもの(das empiriscih=Unendliche)は絕對的無限性の外的直觀(die äussere Anschauung einer absoluten Unendlichkeit)に外ならない。而てこの絕對的無限性の直觀は原本的には吾人に存するが然し外的經驗的發表なくしてはこは決して意識に現はれ來たらない。然るに若し有限的のものゝみが外的に直觀せられ得るに過ぎないとせば、かの無限的のものは、決して完成しないところの卽ちそれ自から無限的であるところの有限性によりての外は、換言すれば無限的に生成するもの(das unendlich Werdende)によりての外は、外的直觀に於て表はされることを得ない』(Erst. Entw., S. 14-15)。卽ち絕對的

活動としての能產的自然は唯だ原本的に能產的直觀の對象としてのみ吾人に對して存在し、決してそれ自から經驗的直觀又は外的直觀の對象となることは出來ぬ、從つてこれが外的直觀換言すれば能產的自然の所產的自然への移行きは唯だ無限的生成(uneedliches Werden)といふことによりてのみ可能である、又は無限的生成の無限的系列に於てのみかの絕對的活動としての原本的無限性は外的に直觀せられ得るのである。然し今吾人はかくの如き無限的生成の無限的系列をば如何樣に表象すべきであらうか。卽ち吾人はこの無限的系列に於ける無限的のもの(das Unendliche)をば單に合成(Zusammensetzung)によりて生產せられたるものと考ふべきであらうか、又はむしろすべて此くの如き無限的系列をば連續(Kontinuität)に於て、無限に流るゝところの一機能(eine ins Unendlibhe fliessende Funktion)として表象すべきであらうか。シェリングによれば、『今數學に於て、凡て個々のものがそれの模寫に外ならないやうな原本的無限的系列は、決して合成によりて成立せずして發展(Evolution)によりて、換言すれば全系列を通じて流貫するところのそれの出發點に於て既に無限なる一つの量の發展(Evolution Einer in ihrem Anfangspunkte schon unendlichen Grösse)によりて成立する、而てこの一つの量の中に原本的にかの全無限性が集中せられる、而てこの系

列に於ける繼次(Sukzession)は、かの本來的には無限的速度を以て起り、從つて何等實際的直觀をも許さないところの無限的系列へのかの量の擴張に對して絶えず制限を立するところの個々の抑制(einzelnen Hemmungen)を表はすものである。かくて經驗的無限性に對する本來的の概念は、無限に抑制せられゆく活動(Tätigkeit, die ins Unendliche fort gehemmt ist)の概念である』(Erst, Entw., S. 15, 16)。今この數學に於ける無限的系列の性質は、又直ちにこを凡ての無限的系列從つて又自然の無限的系列に移して考へることが出來るであらう。前にも述べたやうに能產的自然に於ける觀念的無限的系列は唯だ無限的生成といふことによりてのみ經驗的無限的系列に移行き吾人の經驗的直觀の對象となることが出來るのである。然るに今凡ての無限的系列の理想であるところのかの原本的無限的系列は、吾人の、知的無限性がそれの中に自から發展するところの系列、卽ち時間(Zeit)である、卽ちかの原本的無限的系列を維持するところの活動はやがて又吾人の意識を維持するところの活動と同一でなければならぬ。それ故に純粹時間としてのかの原本的無限的系列に於ける無限性は、かの數の系列に於ける無限性と等しく決して合成によりて生產せられしものとして表象せらるゝことは出來ぬ。純粹時間は決して反省の對象ではなくして直觀特

に知的直觀の對象としてのみ把捉せらるゝことが出來る、從つてこは常に全體として、無限の連續として、無限の活動としてのみそれの實在性を維持するもの、決して個々の時間の合成によりて成立せずして却つて個々の時間は、かの數の系列に於ける繼次が、その出發點に於て既に無限的なる一つの量の自己抑制であつた如く、こは純粹時間の自己抑制自己限定卽ち自己反省としてのみ考ふることが出來ると言はねばならぬ。卽ち『凡て他の無限的系列はかの原本的無限的系列卽ち時間の模倣に外ならぬ故に、如何なる無限的系列も連續的以外のものたることを得ない。それなくしては原本的發展が無限的速度を以て起らねばならぬところのかの原本的發展に於ける抑制者(das Hemmende)は卽ち原本的反省(ursprüngliche Reflexion)に外ならない。それ故に絕對的連續性は唯だ直觀に對してのみ存し、決して反省に對して存在しない。無限的系列は能產的直觀に對しては連續的であり、反省に對しては斷續的であり合成的である。それ故に本來能產的直觀の對象に外ならないところのものをば反省の對象になさしむるところの凡ての機制の法則(Gesetze der Mechanik)は本來反省に對する法則に過ぎないのである』(Eml, S. 285–6)。之を要するに原本的能產性としての普遍的自然が所產物としての現實的自然に發展するのは、換言すれば、觀念

的無限性が經驗的無限性に發展するのは無限的生成といふことに於てである、而てこの無限的生成に於ける經驗的無限的系列は、これやがて原本的能產性の無限に抑制せられ行く系列としてのみ可能である、卽ち原本的活動に於ける無限の抑制、換言すれば無限の原本的反省といふことに於て原本的能產性は無限的生成を通じて所產的自然として發展し來るのである。然らば此くの如く能產的自然に於ける無限的抑制、卽ち原本的反省といふことは如何にして生起するか。これが次に起り來る問題でなければならぬ。

五、シェリングに從へば、自然は前にも述べたやうに無制約者であり、存在自體であり能產性自體である、而かもこの限りに於てそこには何等の規定も限定も存在することを得ない(何となれば規定はやがて否定に外ならないから)從つて自然はそれがかく無規定的無限定的なる純粹能產性として止まる限りそこには何等の抑制も反省もなく、從つて又何等の所產物も可能でなく、かくて客觀としての自然は終に成立することを得ないであらう。然しながらシェリングに於てはこの自然に於ける無制約者、存在自體能產性自體は又同時に時間(Zeit)であり無限的進化(unedliche Evolution)であり、永久なる自己實現の活動でなければならなかつた(Ib., S. 285, 287)。無限的進化、無

限的自己實現は必然的に無限なる自己對象の過程であり、從つて自己反省自己抑制の過程である、卽ち無限に自己を對象とし反省し否定することによりて無限に自己を創造する過程でなければならぬ。それ故にこの自己對象、自己反省自己抑制といふことは、自然が無限なる進化として所產物を通じて自己を實現しなければならぬ限りに於て自然に對して必然的でなければならぬ。然らば此の如き無限的進化の必然的制約としての自己對象、自己反省、自己抑制は如何にして起るか。シェリングによれば、こは能產的自然そのものゝ本質に於ける自己自からに於て分離せらるゝ能產性(die in sich selbst entzweite Produktivität)又は原本的分離性(ursprüngliche Entzweiung)を豫想することなしには理解することは出來ぬ。卽ち『自然は原本的に自己自から對象とならなければならぬ。而て純粹主觀(reines Sucjekt)がかく自己對象(Selbst=Objekt)へ變化するといふことは、自然自からに於ける原本的分離性なくしては考へ得可きでない』(Einl., S. 288)。然らばこの原本的分離性とは如何なる性質のものであらうか。シェリングによれば、こは卽ち自然に於ける積極的傾向(Positive Tendenz)と消極的傾向(negative Tendenz)能產的傾向(produktive Tendenz)と非能產的傾向(antiproduktive Tendenz)又は拒斥的傾向(repulsive Tendenz)と牽引的傾向(Attraktive Tendenz)との原本的對立であ

つて (Ib., S. 288)、この相反對せる兩傾向の無限なる戰ひによりて、自然は必然的に自己からを對象とし、自己自からを反省し、かくして無限に自己を客觀化し實現し行くことが出來るのである。而てかくの如き原本的分離性をばシェリングは又原本的二重性 (ursprüngliche Duplizität) 原本的二元性 (ursprüngliche Dualität) 又は原本的兩極性 (ursprüngliche Polarität) と稱した。而てこの自然に於ける原本的分離性又は原本的二重性は、どこまでも自然發展の必然的なる究極的制約であつて、こは『自然自からの概念の如く必然的』(Ib., S. 277) であり、『もはやそれ以上物理的に演繹することは出來ぬ。何となれば、こは一般に凡ての自然の制約として凡ての物理的說明の原理であり、而て凡ての物理的說明は、自然の中に現はるゝ凡ての對立をば、それ自身もはや顯現しないところの自然の內性に於けるかの原本的對立の上に還元するといふことにのみ關係してゐるからである』(Ib., S. 288)。

以上の如く能產的自然が所產的自然として發展するのは卽ち能產的自然に於ける觀念的無限性が經驗的無限性に移行くのは無限的生成といふことに於てであり、而てこの無限的生成といふことは能產的自然に於ける積極的拒斥的傾向と消極的牽引的傾向との原本的對立の無限の戰ひによりて可能であるとするならば此の如

き原本的對立の無限の戰ひといふことは何を意味するか。元來これ等兩傾向は能産的自然に於て全く同等として立せらるゝもの、この兩者の結合はやがて彼等自からの交互的止揚又は否定であり、かくて無限的生成といふことも從つて又所産物としての自然も不可能であるとも考へられるであらう。然しながらシェリングに從へば、絶對的能産性としての自然に於けるこの原本的對立はそれの本質としての原本的分離性に基づけるものであつて決して反對的活動の單なる對立ではなく、こはどこまでも能産的の對立である、卽ちこの對立の結合に於てこの兩者は決して全然止揚せらるゝことなく更らに新たなる對立に移行きかくして無限の對立を生産し行くところの辨證的發展の對立である、從つて又この兩者の結合に於て所産物は決して無に歸せずして常に再び成立し、絶えず否定せらるゝことによりて絶えず再生せらるゝが如き對立である。卽ちかの原本的對立の無限の戰ひといふことはやがてこの無限の對立を通じての不斷の再生作用といふことに外ならないのである。かくて『不斷に再生せらるゝことなくしては何等所産物の成立も考へ得べきでない。所産物は各瞬時に於て否定せられ而かも又各瞬時に新らたに再生せられると考へられねばならぬ。吾人は本來的に所産物の成立を見ずして唯だ不斷に再生せらる

ゝを見るのみである』(Ib., S. 288-9)。然らば此の如き不斷の再生作用とは何を意味するか。こは唯だ自然に於けるかの兩傾向の結合による所產物が決してかのフィヒテに於けるやうに生命なき死せる非我(Nicht=Ich)でもなければ又自然が目指せるところの絕對的所產物(absolutes Produkt)でもあり得ずしてどこまでも假所產物(Scheinprodukt)であるといふこと、換言すれば、それが Produkt にして同時に produktiv であるといふこと、卽ちそれが能產的所產物(produktives Produkt)であるといふこと、從つて所產物の中に無限的發展にまでの衝動(Trieb zur unendlichen Entwicklung)を包有し『自然がそれの凡ての點に於て宇寅の萠芽(Keim eines Universus)を含む』といふことを意味するものに外ならない(Ib., S. 290-1)。之を要するに自然は『能產性と所產物との間の Schweben』である(Ib., S. 277)。すなはち自然は絕えず一定の形成及び所產物に移行き而も又た再び能產的として之をば逸脫し行くのである。而して自然に於ける此の如き Schweben は、自然の絕えざる活動を維持し而かも同時に之をば妨害するところのかの自然に於ける原本的二重性の必然の結果であると言はなければならぬ。

然しながら以上の如く自然にして能產性と所產物との間の Schweben であり、絕えざる再生作用であり、不斷の創造的發展であるとするならば、自然はかのヘラクリト

スが考へたやうに、無限の流轉として、それが在ることを止めなければならぬ。卽ち所產物に於てはそこに何等の靜止も固定もなく、凡ては限りなき轉變の流れの中に自からを沒し去らなければならぬであらう。此くの如くにして自然に於ける永久性(Permanenz)又は固執性(Beharrlichkeit)といふことは如何に說明せらるべきであらうか。シェリングによれば、若し自然の客觀化といふことにしてどこまでも可能的であり且つ必然的であるならば、自然は必ずこれに於てそれの所產物を固定しなければならぬ、何となれば若し自然にしてそれの客觀化に於てそれの所產物を固定しないならば自然は決してそれの所產物に於て現はるゝことを得ず、從つて一般に何等能產的所產物も可能でないであらうから。かくて自然の客觀化といふことに關しては凡ての變化の中に於ける固執的なるもの(das in allem Wechsel Beharrlichre)が可能的且必然的となつて來なければならぬ。然るに今よつて以て凡ての所產物が成立するところの、自然に於けるかの反對の兩傾向にして、凡ての活動が止まるやうに相互に止揚せらるゝならば前述の如くそこには勿論何等の所產物も可能でないと共に而かも之に反して、この兩傾向の不平衡にして不斷に變化しゆくやうに立せらるゝならば所產物に於て何等の固執性も存在せず從つて所產物は不可能となるであら

う。それ故に所産物にして成立し且つそれの固執性にして保持せられねばならぬならば、かの兩傾向は、その間の無限なる不平衡そのものに於て平衡が維持せられるやうに交互に結合せられねばならぬ。而てこの兩傾向の此くの如き平衡に於て所産物に於ける固執性は成立し、凡ての變化に於ける固定的基體卽ち所謂物質は吾人に對して現はれて來るのである。然しながらこゝになほ疑問は殘る。卽ち何が果して自然をば此くの如き平衡を立するやうに强要するのであるか、又此の如き平衡の立せらるゝ限り吾人は所産物をば休止又は靜止の狀態に於て有つ、從つてこの限りに於て所産物は死物である、然らばこの平衡を破り再び形成及び發展の過程を辿るやうに所産物を强要するものは何であるか、換言すれば所産物をばどこまでも能産的たらしむるところのものは何であるか、卽ちかの所産物に於ける無限的發展にまでの努力とは何を意味するか。今自然に於けるかの積極的拒斥的傾向と消極的牽引的傾向との原本的對立は、前述の如く、自己同一的なる絕對的能産性としての自然に於ける原本的分離性に基いた對立であつた、而かもこの對立は決して單なる反對的對立ではなくして自然の無限なる自己發展の制約として、卽ち一層深く高き自己の統一へ歸入する爲めの內的必然性を有するところの對立であつた。然るに『對

立は同一性の止揚である。而かも自然は原本的同一性である。それ故にこの對立に於て再び同一性への努力(Streben nach Identität)が存在しなければならぬであらう。此の努力は又直接的に對立によりて止揚せられる。これ若し對立なくばこの同一性は絶對的靜止であり、從つて又何等同一性への努力もないであらうから。之に反して對立の中に再び同一性がないならば、對立はそれ自から持續することは出來ぬであらう』(Fin., S. 309)。かくて自己同一的自然に於ける原本的對立と、再びこの同一性へ歸入せんとする所の同一性への努力こそはかの自然をして力の平衡を立するやうに强要するところのものである。然るにシェリングはこの對立の克服によりて到達せらるべき同一性、卽ち差別より生ずる同一性をばかの原本的同一性と區別して無差別性(Indifferent)と名けた(Ib., S. 309)。それ故にかの同一性への努力はやがて無差別性への努力(Streben nach Indifferenz)でなければならぬ。然るに對立又は差別の統一としてのこの無差別性はどこ迄もこの對立によりて制約せられ、この對立の止揚と共に止揚せらるべきである故に、かの無差別性への努力は常に唯だ部分的にのみ到達せられ決して全部的に實現せらるゝことは出來ぬ。それ故にこの努力による凡ての所產物は決して絶對的無差別性ではなくして常に相對的無差別性であり、

從てかの自然の目指せる絶對的平衡としての絶對的所產物は永久に實現せらるゝことは出來ぬ。かくて自然に於けるかの兩傾向の平衡は、その無差別性への努力によりて、絶えず成立しながら絶えず破壞せられ、こゝに自然は永遠の發展の過程を辿らなければならぬ。而てこの絶對的無差別性卽絶對的所產物實現の不斷の努力といふことの中に、かの所產物に於ける無限的發展にまでの努力の眞の意義が存するのである。然らば此の如き原本的對立と無差別性への努力とに基づきて如何にして自然に於ける無限なる性質的多樣が生じ、而してこれが無限の結合として無機的及び有機的自然が發展し來るか、又この發展の原本的機能卽ち彼れの所謂自然の範疇(Kategorien der Natur)は如何なるものであらうか。

六、先づ所產的自然に於ける性質的多樣は如何にして生ずるであらうか。今自然に於ける性質(Qualitäten)の構成の根據に關する最も一般的の又可能的なる說明はかの元子論的說明であらう。卽ち無限なる根源的且つ單一的のものゝ無限の結合によりて無限なる性質的多樣が成立すると說くことであらう。然しながら從來の元子論はそれが機械的元子(mechanische Atomen)を從つて機械的可分割性の有限性(Endlichkeit der mechanischen Teilbarkeit)を主張することに於て誤りに陷つてゐる。卽ち

機械的元子はそれが如何程小であつても、其がどこ迄も機械的である限り空間的であり、從つてこは無限に可分割的でなければならぬ。然るに可分割的のものは決して單一的でなく、單一的でないものは決して元子と言ふとは出來ぬ。それ故に性質的多樣の說明根據としての單一的のものにして可能ならば、そは決してかの元子論者のいふやうに空間的なる機械的元子ではなくして全く空間の彼岸に於て考へらるゝところのものでなければならぬ。空間の彼岸に於て考へらるゝところのものは決して存在ではなくして純粹强度(reine Intensität)又は純粹活動(reine Aktion)でなければならぬ。卽ち單一的のものはそれ自から唯だ動的(dynamisch)にのみ考へらるゝことが出來る。こはそれ自から決して空間中に存在しない、卽ちこは空間充塡の彼岸に於て考へられたものを表はすのみである(Einl., S.293)。かくて凡ての性質の說明根據としての元子は決して機械的に單一的ではなくして動的に單一的(dynamisch einfach)でなければならぬ。而てこの動的に單一的なる原本的活動は、それ自から個別的であり、自己完了的であり、この限りに於てこは自然單子(Naturmonade)とも名付くべきものであり、又之が空間充塡の彼岸に於て考へらるゝところの純粹活動である限りこは純粹エンテレヒー(reine Entelechie)とも稱すべきものである(Einl., S. 293; Erst.

Entw., S. 22-3)。而て此の如き自然單子又は純粹エンテレヒーとしての動的單一者は、かの『自然に於ける無制約者の原本的否定的發表』としての無限の抑制點であり、而てこれが無限の結合によりて種々なる質的雜多を生ずる限りこは又原本的性質(ursprüngliche Qualitäten)であると稱せられ得るのである　かくて凡ての性質は活動(Aktion)である、又は一定程度の活動(Aktion von bestimmten Grad)である(Erst. Entw., S. 24)。即ち『自然所產物の凡ての相異は唯だこの活動の種々の割合よりのみ生起することが出來る。自然の凡ての雜多は唯だ基本的活動(Elementar=Aktionen)の中に求むべきである。質料は凡て一つである、唯だ原本的結合の割合が異つてゐるのみである』(Ib., S. 34-35)。それ故に若し元子論にして或る單一的のものをば性質の說明根據として主張するならばこの限りに於て自然哲學も亦一つの元子論である、而かも自然哲學に於ける單一的のものは、決して機械的單一的ではなくして動的單一的であり、從つてこは決して性質の實在的說明根據でなくしてどこまでもそれの觀念的說明根據である限りこは機械的元子論でなくして動的元子論(dynamische Atomistik)であると言はなければならぬ(Einl., S. 293; Erst. Entw., S. 22)。然らば此くの如き動的元子又は自然單子の結合によりて如何にしてかの所謂無機的及び有機的自然は發展し來

るか、換言すれば自然に於ける動的過程の原本的範疇は如何なるものであらうか。

七、元來シェリングに於ては自然の發展といふことは自然の構成(Bildung)といふことであり、自然の構成はやがて自然の形成(Gestaltung)といふことであつた。それ故に自然の發展の種々なる段階は同時にまた自然の構成作用又は形成作用換言すれば自然の機能の種々なる段階なければならぬ(Erst. Entw., S. 42)。今この自然の構成または形成の機能は、シェリングによれば三つの段階に於いて發展する。即ち第一は、單に密度を異にせる未だ質的に分化せざる無規定的なる一般的物質(allgemeine Materie)の構成であり、第二は、既に質的に分化せる規定的物質即ち無機的自然(unorganische Natur)の構成であり、第三は、生命現象としての有機的自然(organische Natur)の構成である。先づ第一構成としての一般的物質は自然に於て如何にして成立するか。前にも述べたやうに、自然の本質としての絶對的能產性は、それ自からの中に含れまたるかの積極的拒斥的傾向と消極的牽引的傾向との對立によりて無限の抑制點又は自然單子として發現し、かくてこれが無限の結合として絶對的所產物の生產に向ひ行くのである。然し今此等抑制點又は自然單子としての活動の無限の多樣はそれが相互的受容性(wechselseitige Rezeptivität)を有つことなしには、即ち一つの活

動が他の活動に eingreifen することなしには結合することは出來ぬ。而してこれ等活動のこの交互的適合はやがて共同的空間充塡への努力 (Streben nach Erfüllung eines gemeinschaftlichen Raums) に外ならないのである (Erst. Entw., S. 27-29)。然しこの空間充塡といふことは、かの無限の活動が、自己をはなれて獨立的に存在するところの空間を充たすのではない。空間はどこまでも『內部より充たさるるもの』(Ib., S. 29) であつて決して外部より充たさるゝものでない、否な內的 (das Innere) そのものゝ發展がやがて空間に外ならないのである、卽ち活動が空間を充たすのではなくして却つて活動が空間にまで發展するのである。而てこの空間成立の根據は、かの自然に於ける無限に自己を擴張せんとするかの積極的、拒斥的傾向又は accelerirende Kraft に存し、而てこれに對して無限に一點に集中せんとする消極的牽引的傾向又は retardirende Kraft は時間の根據である、卽ち前者は、それの無制限的狀態に於ては絕對的外存 (absolutes Aussereinander) 卽ち無限的空間であり、後者はそれの無制限的狀態に於てはやがて絕對的內存 (adsolutes Ineinander) 卽ち空間の限界としてそれより獨立せる時間の Simbild である (Id., S. 262)。而てこの兩者が相結合し相制約することによりて、時間はそれの延長を得、空間はそれの無限的延長を制限せられて茲に一定の時間に於ける一

定の空間充塡は全うせられ、かくして第一構成としての一般的物質の基礎は成立するのである。それ故に物質とは充たされたる空間(erfüllter Raum)であつて決して空間を充たすところの實質ではない(Einl., S. 392)。空間充塡の根據はどこまでも自然に於けるかの無限の活動そのものでなければならぬ。而てこの空間充塡卽ち一般的物質の結合を維持するところの力をばシェリングは凝集力(Kohäsionskraft)と言ひ而てこの結合の及ぶ限界をば形(Figur)と稱した(Erst. Entw., S, 29)。然るに此の如く物質はそを構成せる無限の原本的活動に於ける消極的牽引的傾向に基づく凝集力によりてその結合を維持すると共に、他方に於てこれ等原本的活動に於ける積極的拒斥的傾向は常に相反撥してこの一定の形としての結合を破り無定形のものに自からを還元せんとする。然るにシェリングに於ては『無定形のもの(das Gestaltlose)は流動的のもの(das Flüssige)である。流動的のものは絕對的無形式的のもの(das adsolut=Formlose)卽ち μὴ ὄν ではなくして却つて凡ての形體を受け易きもの(das jeder Gestalt Empfängliche)卽ち無定形のもの ἄμορφον である。卽ち流動的のものは一般に、それに於て如何なる部分も形に依て他の部分より自からを區別しないところの塊(Masse)として定義せられねばならぬ』(Erst. Entw., S. 31)。而て此の如き流動性の極限は絕

對的流動者(absolut=Flüssiges)であつてこは『それの中に最も輕微なる變化によりても亂さるゝところの行爲の最も完全なる平衡が存するもの』(Ib., S. 35)であり、從つてこは最も分解し易きもの(das Dekomponibelste)であつて決して結合的(kompositbel)ではない。而て此の如く自然に於ける積極的拒斥的傾向に基づく絶對的流動性の原本的現象をばシェリングは光(Licht)又は火質(Feuermaterie)と稱し、而て之に對してかの消極的牽引的傾向に基づく絶對的結合性の原本的現象を重量(Schwere)と名付けた。(但しこゝにいふ光とは、決し　普通の視覺の對象としての光ではなくして却つてこを成立せしむる光の作用自體ともいふ如きものである、卽ち『光は決して生成する物質(werdende Materie)ではなくして生成自體(das Werdende selbst)である。こは吾人の感覺の最高限界を表はすものである故こはもはや事物又は物質であることを得ない』(sämmtliche Werke I3, S, 172, 208)とシェリングは言つて居る)。而てこの光と重量とは一般的物質の原本的機能であつて卽ち凡ての結合より自己を解放し無限に自己を擴張せんとする絶對的流動性としての光は凡ての活動又は自由の原理であり、而てこれに對して凡てを一つに結合せんとする絶對的固定性としての重量は凡ての束縛又は强要の原理である從つて前者は自然に於ける不可量物(Imponderabilien)の根源

であり、後者は凡ての形質的なる可量的物質(wägbare Materie)の原理である。而てこの光と重量卽ち自由と束縛との根本機能の結合及び發展によりてこゝにかの一般的物質は無機的自然として發展し來るのである。今絕對的單純として現はれ何等兩極性の分化をも示さず、却つて凡ての兩極性の原本的統一であるところの光は、かの自然に於ける原本的二重性の原理に基づきこゝに三種の兩極性(Polarität)として發展する、かの磁氣(Magnetismus)、電氣(Elektrizität)及び化學作用(chemischer Prozess)は卽ちこれである。(シェリングは『光は兩極性の積極的の原因である』(sämmt. Werke I2, S. 397)と言つて居る)。而てこの兩極性は磁氣に於ては直線的又は一次元的であつて、こは自然の生產作用の第一段階としてかの原本的對立を表はし、次に電氣に於ては、こは平面的又は二次元的であつてかの生產作用の第二段階としての膨脹及び收縮の變化を表はし、而て化學作用に於ては、こは前二者の綜合として立體的又は三次元的であつて、かの生產作用の第三段階たる膨脹及び收縮の變化より無差別性への移行きを表はす(Einl., S. 321; sämmt. Werke I4, S. 15. 1?. 49)。而てこれ等三種の兩極性はかの固定性の原理としての重量と結合することによりて、第一構成としてかの無性質的抽象的なる一般的物質をば、第二構成としての質的具體者たる無機的自然にま

で高め、こゝに種々なる具體的の固體、液體、氣體は成立するのである。それ故にシェリングは、この磁氣、電氣及化學作用の三機能をば、自然の一般的力學的活動根源(allgemeine dynamische Tätigkeitsquell)又は自然の原本的構成の範疇(Kategorien der ursprunglichen Konstruktion der Natur)と言ひ(Erst. Entw., S. 218; Einl., S. 321)、而してこれによりて成立せる無機的自然をば、自然に於ける第一展相の所產物(Produkt der ersten Po'snzen)と言つて居る(Einl., S. 322)。然しながら此の如く一般的物質の發展としての無機的自然は、質的具體者としての動的過程ではあるがこは未だ眞の意味に於ける生命としての動的過程ではない。元來生命の本質は內外兩界の內面的結合にありとするならば、それの根源はかの積極的拒斥的傾向と消極的牽引的傾向との原本的綜合としての能產的自然にあるは言ふまでもない、從つてそれの必然的發展としての無機的自然もそれがどこまでも原本的對立の基礎の上に成立する限り、卽ちそれがProduktであると同時にproduktivである限り一つの生命現象であると言ふことが出來るであらう。然しながら、純粹活動としての能產的自然に於ては、未だ嚴密なる意味に於ける內界と外界との區別が分化せず、從つてそれに於ては個體としての生命の反省がない。無機的自然に於ては、內外の區別は或意味に於て存するが然し此の兩者の結合は單

に外面的であつて未だ內面的ではない、卽ちこの兩者の關係は單に機械的であつて有機的ではない、從つてこれに於ても未だ充分なる個體としての具體的生命は成立しない。それ故に眞の具體的生命現象は無機的自然に於てゞはなくしてこれよりも一層高き展相に於ける自然卽ち內外兩界の內面的結合の充分に實現せらるゝ有機的自然に於てゞなければならぬ。然らば此の如き生命現象としての有機的自然は如何にして成立し發展するであらうか。シェリングによれば、元來『生命の原理は、それが發現する場合には、外界物質の凡ての堆積に對して、又外力の凡ての壓迫に對して自から抵抗するところの活動である。而かもこの活動は、かの外的壓迫によりて興奮せらるゝことなしには發現しない、從つて生命の消極的制約は、外的影響による興奮(Erregung durch äussere Einflüsse)である』(Erst. Entw., S. 81)。それ故に『有機的生命は對象による活動の反射(Reflex einer Tätigkeit durch ein Objekt)と共に始まる、而て對象それ自からは、有機的活動に對して、唯だ反射點(Punkt des Reflex)として關係する。それ故に、若しこの反射點にして無限のかなたに存するならば卽ちその活動が絕對的活動ならば、活動はもはや反射せられない。然るに之に反して、この反射點にして無限のこなたに存するならば卽ちその活動が絕對的受容性であるならば、その活動はもは

や何等の延長をも有たず全く自己自からの中に消失してそは死せる物體となる。』(Ib., S.87)。かくて有機的生命の原本的本質は外界刺戟に對する內界の生產的反動又は對象による活動の反射としての興奮性(Erregbarkeit)といふことに存する、外界に對する內界の反動なきところには何等の生命現象も可能でない、卽ち生命現象としての有機的自然は實に此くの如き興奮性の發生と共に成立するところの自然でなければならぬ。然らば此くの如き內外兩界の內面的結合としての興奮性は如何にして成立するか。今この興奮性が成立する爲めにはそれの本質上次の如き四つの根本條件が必要である、卽ち第一は、興奮の外的原因としての外界の存在、第二は、この外界刺戟の受容性としての感覺性(Sensibilität)、第三はこの受けいれたる刺戟に對する反動性としての激動性(Irritabilität)、第四は、かの感覺性と激動性との綜合として、外的作用をば內的作用に、卽ち自己自からの獨異なる創造的活動に變ずるところの再生作用(Reproduktion)又は構成衝動(Bildungstrieb)である。それ故に、外的自然卽ち無機的自然は、生命現象としての有機的自然の必然的制約であつて、有機的自然は、この無機的自然を基礎として、卽ち無機的自然のより高き展相として發展したものであり、從つて、無機的自然が第一展相の所產物であるに對し、有機的自然は、第二展相の所產物

(Produkt der zweiten Potenzen) でなければならぬ。而てこの有機的自然が無機的自然に對して偶然的として現はるゝに對し、かの無機的自然が有機的自然に關して必然的として現はれ、從つて前者が以前より存在せるものとして現はるゝに對し、後者が成立せるものとして現はれるのは、全く後者が前者のより高き展相であるからでなければならぬ。從つて後者卽ち有機的自然を成立せしむるところの根本機能も亦前者卽ち無機的自然の根本機能のより高き展相でなければならぬ。卽ちこの有機的自然に於ける一次元的なる感覺性はかの無機的自然に於ける同じく一次元的なる磁氣のより高き展者であり、次にこれに於ける二次元的なる激動性は、かれに於ける同じく二次元的なる電氣のよりより高き展相であり、而て、これに於ける三次元的なる再生作用は、かれに於ける同じく三次元的なる化學作用のより高き展相でなければならぬ(Einl., S.325; Erst. Entw., S.207-18)。然らば有機體をして成立せしむる所のこれ等三つの根本機能は相互に於て如何なる關係に於て立つか。シェリングに從へば、『有機體が興奮的である爲めには、そは先づ自己的からと平衡に於て立たなければならぬ、而てこの平衡點に於て客觀としての有機體が成立する。若し有機體にして自己自からと平衡に於て立たないならば、この平衡は決して破られ得ないであらう、

從つて有機體には何等動的活動根源も存在せず、それ故に又それに於て何等の感覺性も存在しないであらう。然るに感覺性は有機的平衡の攪亂に外ならない故に、こは平衡の連續的回復に於てのみ可認識的である。而て此の如き回復はやがてかの激動性の現象によりてのみ現はれて來る。それ故に興奮性の原本的要素は、必然的に共存するところの感覺性と激動性とである。然るに凡ての回復の所産物は常に再び有機體そのものである故に、この回復は、最深の段階に於ては、有機體の不斷の自己生産として現はれ而てそれの原因は再生力として現はれるのである』(Erst. Entw., S.205-6)。此の如く外界刺戟を受容する感覺性とこれに反動する激動性とは生命の必然的制約としての興奮性の原本的二要素をなすものであり而てこの兩者の內面的綜合は再生作用又は構成衝動として現はれ來り、かくしてこゝに具體的なる有機的生命は成立するのである、而てこれ等三つの根本機能の種々なる結合の仕方の差によりて最下等の有機體より最高等の生物に至るまでの種々なる發展段階を生ずるのであるが、然しこの中に於て有機的生命發展の最も重要なる契機をなすものは言ふまでもなく感覺性である。外界刺戟を受容するところの感覺性なくんば之に反動する激動性もなく、從つてこの兩者の綜合としての自己再生作用も可等でない

であらう。然しこゝにいふ有機的生命の原本的契機としての感覺性とは決して普通考へられてゐるやうに單なる有機的所產物ではない、卽ちこは感覺機官の單なる所產としての主觀的作用ではない。感覺機官によりて感覺性が生ずるのではない、却つて感覺性が感覺機官を造りゆくのである。それ故に『感覺性はそれの機官が造らるる以前に存在する。かの腦髓及び神經は感覺性の原因である代りに、むしろそれ自から感覺性の所產物である』(Ib., S.155)と言はなければならぬ。かくて感覺性の眞の原因は決して感覺機官從つて又外界に存せずしてどこまでも內界に存する。卽ち感覺性は『それの主觀に歸りゆく活動』(eine in ihr Subjekt zurückgehende Tätigkeit) (Ib., S. 197)であつて、從つてこはかの絕對的能產性としての自然に於ける原本的二重性にそれの根據を有すると言はなければならぬ。而てそれの主觀に歸りゆくところの活動はやが有機的生命の本質であつて、凡ての反省凡ての意識は唯だ此の如き感覺性によりて生じ、從つて有機體をば無機物より區別する根源的標徵もこゝに存すると言はなければならぬ。かくの如くにしてこの感覺性は生命そのものゝ結果であるよりも、むしろそれ自から『生命の源泉及び根源』である(Ib., S. 156)。從つてこの感覺性の發達はやがて生命發達の尺度であり、而て自然はこの感覺性の發展を

通じてそれの目的なる自覺的叡智にまで自からを高め、かくしてこれによりて自己そのものゝ本質及び發展をば再認識することによりて更らにより高き自己をば實現しゆくことが出來るのである、而てこゝに又自然哲學が先驗哲學に移行くべき契機が存するのである。

八、上來吾人はシェリングに從ひ、能產的直觀の對象としての能產的自然の概念より出發し、それの本質を反省することによりて如何にしてこの能產的自然が所產的自然に發展し、無機的及び有機的自然をば成立せしむるか、而てその發展の原本的機能又は範疇は如何なるものなるかを概觀したのであるが、然らば此くの如き自然の發展史としての自然哲學は吾人に對して果して何事を示すであらうか。元よりシェリングの自然哲學は、一般に知らるゝやうに、彼れの當時の自然科學、特にかのガルバニ(Galvani)の流動電氣說(Galvanismus)、デービー(Davy)の電氣化學說(Elektrochemismus)、エルステッド(Oersted)の電磁氣說(Elektromagnetismus)、ファラデー(Faraday)の磁電氣說(Magnetelektrizität)、ラボアジェー(Lavoisier)の新燃燒說(neue Verbrennungslehre)、ブラウン(Brown)の新興奮說(neue Erregungslehre)及びキールマイエル(Kielmeyer)の進化說(Entwicklungslehre)等の歸結をば、かのライプニッツのモナード論、カントの目的觀及びフィヒテの知的直觀の

概念と結合し、之をばシェリング自からの豐富にして放膽なる想像力と獨創力とによりて體系化したものである限り（K.Fischer, Schelling, S.319-47）自然科學の偉大なる發展と變動とを遂げたる今日より見て、その實質的歸結の、多くの不合理と不整合とを有つてゐるといふことは言ふまでもないことであらう。然しながらこれにかかはらず彼れが自然の哲學化に於てとつた根本精神と方法とは、かの自然の理性化又は自由化といふことに關して、如何にしても認めなければならぬ眞理を含んでゐると言はなければならぬ。前にも述べたやうに自然は單に理知の對象としては、永久に克服することの出來ぬ非合理性を含む、自然は單にそれの論理的構成を明らかにすることよりてそれの本質を明らかにせらるゝことを得ない。自然は唯だ知情意の深き內面的統一としての知的直觀の對象としてのみ、換言すれば、自然の單なる論理的構成の規定ではなくして、直ちに自然そのものゝ根柢に於てそれの原本的機能を把捉し之が內的發展を辿ることによりて、從つて機官によりて機能が發生するのではなくして却つて機能に依て機官が發生し種々なる形體が發展すると考ふることによりてのみ自然の本質と意義とは明らかとなる。この意味に於てシェリングの自然哲學は、かの對象をば單に或る外的立脚地より見るのではなくして直ちに對象そのものゝ內部に

突入し、絶對の相に於てそれをば捉へんとする直觀的方法をば自然に對して適用することによりて、自然の本質をば不斷の創造的發展としての純粹持續又は創造的衝動に於て理解し、これが無限なる緊張と弛緩との關係を通じて凡ての物質界及び生物界の發展を見、從つて物質に於て生命を理解せず、機官に於て機能を理解せずして、却つて生命によりて物質を、機能によりて機官を理解すべきである、卽ち眼あるが故に見るのではない、見るが故に眼は存するのであると主張する所のベルグソンの創造的進化の說をばさながらに豫示してゐると言はなければならぬ。かくてシェグリグの自然哲學の本質的價値はどこまでもそれの動的立脚地に存する、卽ちそれが單に自然の機械的體系化でなくして却つて自然そのものゝ目的論的發展史である所に存する。卽ち『從來の自然史(Naturgeschichte)は、かのカントが正當にも注意したやうに、全く自然叙述(Naturbeschreibung)であつた。而てカント自からは、この自然史なる名稱をば、自然科學の特殊的分科として、卽ち世界の種々なる有機制が外的自然の影響によりて受くるところの漸次的變化の認識として用ひた。然るに若し上述の如き理念卽ち自然自からに於ける動的段階の先天的演繹にして可能であるならば、自然史てふ名稱は、はるかにより高き意義を獲得するであらう、何となればそこには實

際に自然そのものゝ歴史が存するから』(Erst. Entw.,98)。然らば此の如き自然史に於ける自然の目的論的意味は如何なるものであらうか。前にも述べたやうに、かの自然の本質としての能産的自然が、それの所産物を通じて絶えず近づき行かんとするところの究極目的は、卽ち絶對的所産物又は普遍的有機體の構成といふことであつた。而てこの絶對的所産物は、自然の根柢に於て横はり且つ生命成立の必然的原本的制約をなせるところのかの消極的牽引的傾向と積極的拒斥的傾向、換言すれば結合過程と分解過程との最も完全なる結合であつた。然るに結合は活動の交互的制限であり、之に對して分解は結合の止揚卽ち自由である。かくて自然の目指すところの最も完全なる所産物としての絶對的所産物又は普遍的有機體は、絶對的結合であると共に絶對的分解であり、絶對的必然であると共に絶對的自由でなければならぬ。換言すれば『これに於て活動の最大の自由(卽ち交互的獨立)と最大の束縛(卽ち交互的從屬)とが同時に相互に成立しなければならぬ』(Ib., S.39)。而て此の如き性質の結合は實に自然の共同的理想(ein gemeischaftliches Ideal)であつて自然の凡ての努力は悉くこれの上に向けられてゐるのである。而かも『發展の凡ての段階に於て構成的自然(bildende Natur)は常に一定の形體の上に制限せられ而て此の形體に關して全く

束縛せられる』(Ib., S.43)を以て、個々の所産物はどこまでも此くの如き共同的理想の實現に到達することを得ない、從つて『自然に對しては個體は zuwider であり』而て普遍的有機體に於ては如何なる個體も殘留すること得ない故に(Ib., S43, 70)、個體は此くの如き共同的理想を實現せんための失敗せる試み(ein misslungener Versuch)であると言はなければならぬ(Ib, S. 43, 51)。かくの如く自然に於ける個々の所産物は全く絶對的所産物を表はさんとする失敗せる試みである故に、個體はどこまでも自然の手段であつて決してそれの目的ではない、自然の目的は決して個體ではなくして種(Gattung)でなければならぬ、即ち『個體は滅し種が殘る』(Ibr, S.51)と言ふことが自然の要求でなければならぬ。而てこのことはかの自然に於ける性的差別(Geschlechtsdifferenz)といふことに於て明らかに證示せられる。即ち個體的生命の最高機能は種の目的(Gattungszweck)と一致する。而てこの種の目的の充足と共に個體的生命は衰滅し而て自然は個體的生命を維持すべき何等の關心をも有たない。即ち個體的有機體が高ければ高いほど、性的差別はますます明白となり而かもこれと共に各個體はますます不完全となる、こは明らかに自然が個體そのものを目的とせずして却つて種を目的とし而て個體によりてにあらずしてこの種の絶對的發展を通してそれ

の共同的理想を實現せんとするものであることを示すものでなければならぬ。之を要するに自然の目的は自然そのものの本質としての絶對者の實現である、卽ち絶對的結合と絶對的分解、絶對的必然と絶對的自由との完全なる結合としての絶對的所產物の實現である、而かもこは決して個體に於てではなくして種に於ける實現である、換言すれば凡ての個體の絶對者への還沒といふことが全自然の意義であり且つ目的であると言はなければならぬ。かくてカントに於て單に判斷力の主觀的又は形式的原理に過ぎなかつたところのかの自然の合目的性の概念は、今やシリェングに於ては自然そのもの客觀的又は形而上學的原理となつたのである。卽ち自然はそれの原本的機能の動的發展段階に於て、それの究極理想なる絶對自由と絶對必然との完全なる結合としての絶對者の實現に努力する。而かもこの發展段階に於て自然そのものはどこ迄もそれの本質に於て生成する精神(werdender Geist)であり、又は可視的となつた理性(die sichtbar gewordene Vernunft)に外ならない。從つて自然界と理性界、必然界と自由界とはそれの最深の根柢に於て同一的でなければならぬ。卽ち一方は他方が意識的に含むところのものをば無意識的に含む、而て自然の永久の過程はそれの無意識的衝動の中に精神又は自由を生產し實現するといふことである。

かくて、かのカント及びフィヒテの倫理的形而上學に於ける自然と自由との對立は、シェリングがその自然哲學に於て、自然の根柢に自由を見、自由の流れの中に自然をば溶解し去りたる間に止揚せられ、而て彼れに對しては自然は全く純粹なる自由そのものの發展となつたのである、而てこゝに彼れの自然哲學の根本的の獨異質と意義と價値とが存すると言はなければならぬ。（未完）